

巻 頭 言

学術・科学領域における査読は、複数名の研究者や専門家によるさまざまな視点からの学術的・科学的価値を評価するシステムとされている。そして今や、論文評価のゴールド・スタンダードとなっている。ときには、論文の学術誌掲載の決定だけでなく、学会での発表演題や研究助成金申請の採択にまで広く影響を与えている¹⁾。

この査読の歴史は古く、TRENDS in Biotechnology の Spier R (2002) による The history of the peer-review process では、200 年以上前から存在したとされている²⁾。そもそも学術誌が誕生した頃は、掲載論文の決定は編集者が行っていたらしい。しかし、専門分野の細分化や学術誌の増加に伴い、編集者だけでは捌ききれなくなり、次第に専門家による査読が定着していったようである。つまり、編集者は、専門家集団に投稿された論文の評価（査読）を依頼し、彼らの評価をもとに学術誌への掲載採否を決めるようになったのである。したがって、査読は、学術誌の編集者と査読者と投稿した研究者の三者のコミュニケーション手段でもあり、唯一最善のシステムとされるようになったのである¹⁾。とくに近年では、ありとあらゆる分野で膨大な数の論文が国内外で毎日のように投稿され、さらには IT 技術の進歩により大量のデータを短時間で電子データとしてやり取りされるようになった。そのため査読者の果たす役割は、膨大な投稿論文の中から学術的・科学的意義のあるものを選択し、学術誌の価値を高めることにある。つまり、①投稿論文を評価し掲載の採否を決定するための情報提供だけでなく、②投稿論文の学術的・科学的質の向上に寄与することが査読者の役割でもある¹⁾。投稿した研究者と査読者の間で、査読コメントというコミュニケーションを通して、投稿論文の質を高めるのである。そういう意味では、査読者は決して投稿した研究者の敵ではなく、自身の研究チームの一員であると考え、査読コメントを大切にしてほしいと願う。

その一方で、査読は査読者の善意にもとづくボランティア作業でもある。日常業務に忙殺されながら、何とか時間をやりくりして査読作業を行う。ある報告では、一つの論文を精読し評価して査読コメントを書くためには最低でも 8 時間以上を要すると言われている³⁾。そのくらい骨が折れる作業でもある。しかも基本的に、匿名であり無報酬である。学術誌によっては 1 本の投稿論文のために複数名の査読者を確保するだけでも困難を極めることもあると聞く。こうした状況を理解している研究者は、「お互い様」と暗黙の了解をしてくれて、その多くはこのような大変な査読を引き受けてくれる。しかし、研究者が査読を請け負うモチベーションは、あくまで崇高な善意だけであることを投稿者は忘れてはならない。

あらためて、本紀要の査読に協力いただいた先生方に謝意を表す。本年度からは、本学部の業績評価基準に学術雑誌の査読も加えられることになった。少しでもインセンティブになればと思う。

さて、査読は大変な作業であると同時に、査読者自身が論文投稿者となったときに恩恵をこうむることもある。つまり、査読者としての視点をもつことで、自身が論文を執筆する際に役立つことも多い。すなわち、査読を行うことで、論文が評価されるポイントを査読者として学べるのである。したがって、自身が投稿する際に、論文のどういうことが重要で査読者が何を求めているのか、広く深い視点で客観的に捉えることができる。また、査読者からの査読コメントにも「ただただ回答する」だけであった姿勢から一歩進んで、査読者が求めているポイントを深く理解し、「踏み込んだ回答」ができるようになる。そうすることで、さらに発展的な問題解決につながり、あらたな研究課題を設定できるようになる。

筆者が米国の大学に研究留学した際にも、後期博士課程の大学院生にすでに投稿された論文について著者を匿

名にして査読をさせ、採択の可否まで決定する演習が行われていた。こうした査読の練習を通して、自身の論文執筆に活かすことが演習の目標であると指導教員から伺った。つまり、「査読は他人を評価することではなく自身が学ぶこと」であると教わった。現在、筆者自身の大学院の講義でも、参加大学院生は自身の研究計画書を作成し、複数名の大学院生間で互いに厳しく査読を行い、査読コメントを作成するという演習を進めている。そうすることで自身の研究計画を客観的に捉えることができるようになると期待している。さらには、筆者自身の投稿前の論文もできるだけ厳しく査読を行ってもらい、査読コメントを求めている。今後もさらに続けていきたいと思っている。

査読依頼は、自身の専門分野で研究者として認められたということでもあり、自身の論文執筆に役立つと考え、今後も積極的に受けていただければ幸いである。

- 1) 大前憲史：医学論文査読のお作法. 2020. 健康医療評価研究機構. pp.8-36
- 2) Spier R.: The history of the peer-review process. Trends Biotechnol.2002;20(8):357-358
- 3) Nicholas KA. et al.: A quick guide to writing a solid peer review.EOS.2011;92(28):233-240

県立広島大学 保健福祉学部学部長
城 本 修